

# 芭蕉における『本朝一人一首』の受容

——『嵯峨日記』・『おくのほそ道』を中心に——

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 陳 可冉

林鶯峰編『本朝一人一首』（寛文五（一六六五）年跋刊）は、日本漢文学の本格的な研究書の嚆矢として、新日本古典文学大系にも収録された名著である。今から三百二十年前の元禄四（一六九一）年、同書が落柿舎の机上にも置いてあったことは、芭蕉の『嵯峨日記』によって知られる。

落柿舎中の芭蕉は『本朝一人一首』を読み、中の詩作に対する自己の所感まで書き残しているのである。『本朝一人一首』が芭蕉と日本漢詩との接点を裏付ける重要な糸口であることは間違いない。ところが、芭蕉研究における『本朝一人一首』の意義をめぐって、これまで十分な検討がなされているとは言い難い。本稿では、『本朝一人一首』の性格と特徴をよく把握した上で、『嵯峨日記』と『おくのほそ道』を中心に、芭蕉における『本朝一人一首』の受容について若干の考察を試みたい。

『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の条は、いわば『本朝一人一首』の読書メモにあたる。稿者は、その前日である四月二十八日の条に焦点をあて、現在最も信頼された『嵯峨日記』の底本である野村家蔵本（原本所在未詳）を参照しつつ、四月二十五日の条の末尾との比較によって、『嵯峨日記』には本文と自注という二種類の異なる文章が併存し、しかも芭蕉はそれらを意識的に書き分けているのではないかと論じる。次に、「思夢」の話を扱う『本朝一人一首』巻五・高階積善「夢中謁白太保元相公」に注目し、芭蕉が評釈の手法を好んで用いたのは『本朝一人一首』の詩評からの影響であろう、という見解を述べる。

以上の結論を踏まえて、執筆時期が『嵯峨日記』に近い『おくのほそ道』をも祖上に載せ、句評の形式で曾良を紹介した「黒髪山」を取り上げ、鶯峰の詩評の特徴に合致した芭蕉の行文を分析する。さらに『おくのほそ道』「立石寺」・「尿前の関」における語句の出典として、『本朝一人一首』巻六・藤原実範「遍照寺翫月」と巻三・空海「在唐觀昶法和尚小山」を指摘し、芭蕉と『本朝一人一首』所収の日本漢詩との関わりを探る。

キーワード：芭蕉 本朝一人一首 嵯峨日記 おくのほそ道 林鶯峰 日本漢詩 俳諧

はじめに

- 一 『本朝一人一首』の詩評
  - 二 『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の条
  - 三 四月二十八日の条
  - 四 『おくのほそ道』における曾良の登場と紹介
  - 五 立石寺と長楽寺
  - 六 一鳥声聞かず
- おわりに

## はじめに

芭蕉と『本朝一人一首』の関わりといえば、すぐに思い出せるのは『嵯峨日記』の冒頭である<sup>(1)</sup>。

元禄四辛未卯月十八日 嵯峨にあそびて去来ガ落柿舎に到。凡兆共ニ来りて暮に及て京ニ帰る。予ハ猶暫とゞむべき由にて、障子つゞくり、葎引かなぐり、舎中の片隅一間なる処伏処ト定ム。机一・硯・文庫・白氏集・本朝一人一首・世継物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を置。

芭蕉自らの証言によれば、嵯峨滞在中、彼の手元には六種の書物があつた。『白氏文集』に続いて、林鶯峰編『本朝一人一首』も「舎中の片隅一間なる処」の机上に置かれたことは興味深い。そればかりでなく、『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の記録から分かるように落柿舎中の芭蕉は『本朝一人一首』を読み、中の詩作に対する自己の所感まで書き残しているのである。『本朝一人一首』が芭蕉と日本漢詩との接点を裏付ける

重要な糸口であることは間違いない。

ところが、芭蕉研究における『本朝一人一首』の意義をめぐって、これまで十分な検討がなされているとはいえない<sup>(2)</sup>。本稿では、『本朝一人一首』の性格と特徴をよく把握した上で、『嵯峨日記』と『おくのほそ道』を中心に、芭蕉における『本朝一人一首』の受容について若干の考察を試みる。

## 一 『本朝一人一首』の詩評

『本朝一人一首』は書名の通り、日本の漢詩人一人につき一首の詩作を取り上げ、それに対し、鶯峰の評釈を加える体裁で編まれた詩集である。少々長いが、まず『日本古典文学大辞典』の該当項目(大曾根章介氏執筆)を引用しておく。

本朝一人一首ほんちょういっしゅう 十卷五冊。漢詩文研究。林鶯峰編。万治三(一六六〇)年自序。【内容】日本漢詩を批評したもの。序によると、父羅山が『本朝詩選』を編纂しようとして他界した遺志を継いで、我が国の漢詩集をひもとき、嫡子梅洞に詩を抄出させ自ら批評したという。作者一人につき一首を選び、詩の批評や作者の伝記を記す。作者は大友皇子から江戸初期の徳川義直に至るまで三百余人に及んでいるが、五山の詩僧は除く。卷一が『懷風藻』、卷二・三が勅撰三集、卷四が『本朝文粹』等、卷五が『本朝麗集』、卷六が『本朝無題詩』、卷七が鎌倉時代以後の作品、卷八が一聯の詩句のみ存する者、卷九が擬作や無名氏作、卷十が中国の書物にある邦人の作品で、引用書目は歌書・稗史・日記・短冊まで活用している。編者は尊敬と愛情をもって詩人に接し、批評も好意的である。最初の日本漢文学研究書として価値が高い。【諸本】内閣文庫や東大史料編纂所等に写本があり、寛文五(一六六五)年・同十年刊本が存するが、

内容は変わらない<sup>(3)</sup>。

右の解題にも言及されたように『本朝一人一首』における詩評の特色は、作品の批評だけでなく、作者の伝記も記すことにある。鶯峰は『本朝一人一首』の自序の中で「然れども詩を選ぶは我事に非ず。唯見るに随ひ得るに随ひて、信等を使って作者の姓名を知らしむる而已」（原漢文）と、長男の梅洞（春信）らに日本の漢詩人に関する伝記的知識を伝授することが本書を編纂する主な目的であると明言し、文芸の評論よりも人物の紹介や史実の考証に立脚する姿勢が鮮明であった。一例を挙げると、『本朝一人一首』巻五・藤原道長の項<sup>(4)</sup>は次の通りである。

暮秋宇治、別業

藤原道長

別業號、傳、宇治名

暮雲路僻、隔、華京

柴門月靜、眠、霜色

旅店風寒、宿、浪聲

排、戸、遙、看、去

卷、簾、斜、望、雁、橋、橫

勝遊此地猶雖、盡

秋興將、移、潘、令、情

林子曰、藤氏權勢至、道長、彌盛。上海、二人、下領、四海。男爲、丞相、女爲、后妃。世繼翁物語三卷、半是道長之事。赤染榮華物語四十卷、本是爲、道長、華美、作、之。其強大僭上、不可、勝計。曾營、法成寺、大伽藍。故俗稱、道長、曰、御堂關白。奢侈如此。而好、詩、且、能、書、不、亦、奇、乎。其別業在、洛外、宇治。此是暇日逍遙、之作也。

「林子曰く」以降のものはすべて鶯峰の詩評になるが、その詩評の大半を占めているのは、道長の伝記にまつわる話であり、「暮秋宇治別業」という作品自体への評釈はただ最後の一言、「其の別業洛外の宇治に在り。此は是暇日逍遙の作也」と、単にそれだけである。

## 二 『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の条

さて、そのような内容と性格をもつ『本朝一人一首』であるが、巻九に収録された無名氏の「賦高館戰場」を読んで、芭蕉は『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の条を記した。

廿九日 『一人一首』奥州高館ノ詩ヲ見ル。  
晦日 高館聳天星似靑。衣川通海月如弓。其地風景聊以不叶。古人といへ共、不至其地時は不叶其景。

この部分は明らかに落柿舎における行動の記録（A）と、原詩の引用（B）と、それに対する芭蕉の詩評（C）から構成されている。「其の地の風景聊か以て叶はず。古人といへども、其の地に至らざる時は其の景に叶はず」という、いかにも漢文風の寸評は、鶯峰の詩評に擬する形で書かれたであろうことは贅言を要しない。

『本朝一人一首』の読書メモにあたるこの二日間の日記をめぐって、Aの一行だけが四月二十九日の記事であり、BとCは晦日の分と解すべきか、それとも、AからCまでの内容を一つのまとまりと見なし、それを四月二十九日・晦日の二日分の記録として捉えるべきか、諸注の間意見の齟齬が見られるが、稿者は後者の説<sup>(5)</sup>に従いたい。

その点について少し付け加えると、芭蕉自筆本の忠実な臨模とされる野村本『嵯峨日記』を一つの証左として挙げられるのではないかと考える。図1（次頁参照）野村本の写真を確認してまず気付くのは、四月二十九日・晦日の部分は前後の書き方とだいぶ雰囲気が違うということである。ほかの条と比べて文字も小さく、かなり圧迫された印象が強い。全体的に限られたスペースの中に密集しているように見える。

日付と本文の位置関係でいうと、四月二十三日の条以降、野村本の書き方は基本的に日付のある行を改行してから日記の文章を綴るとい

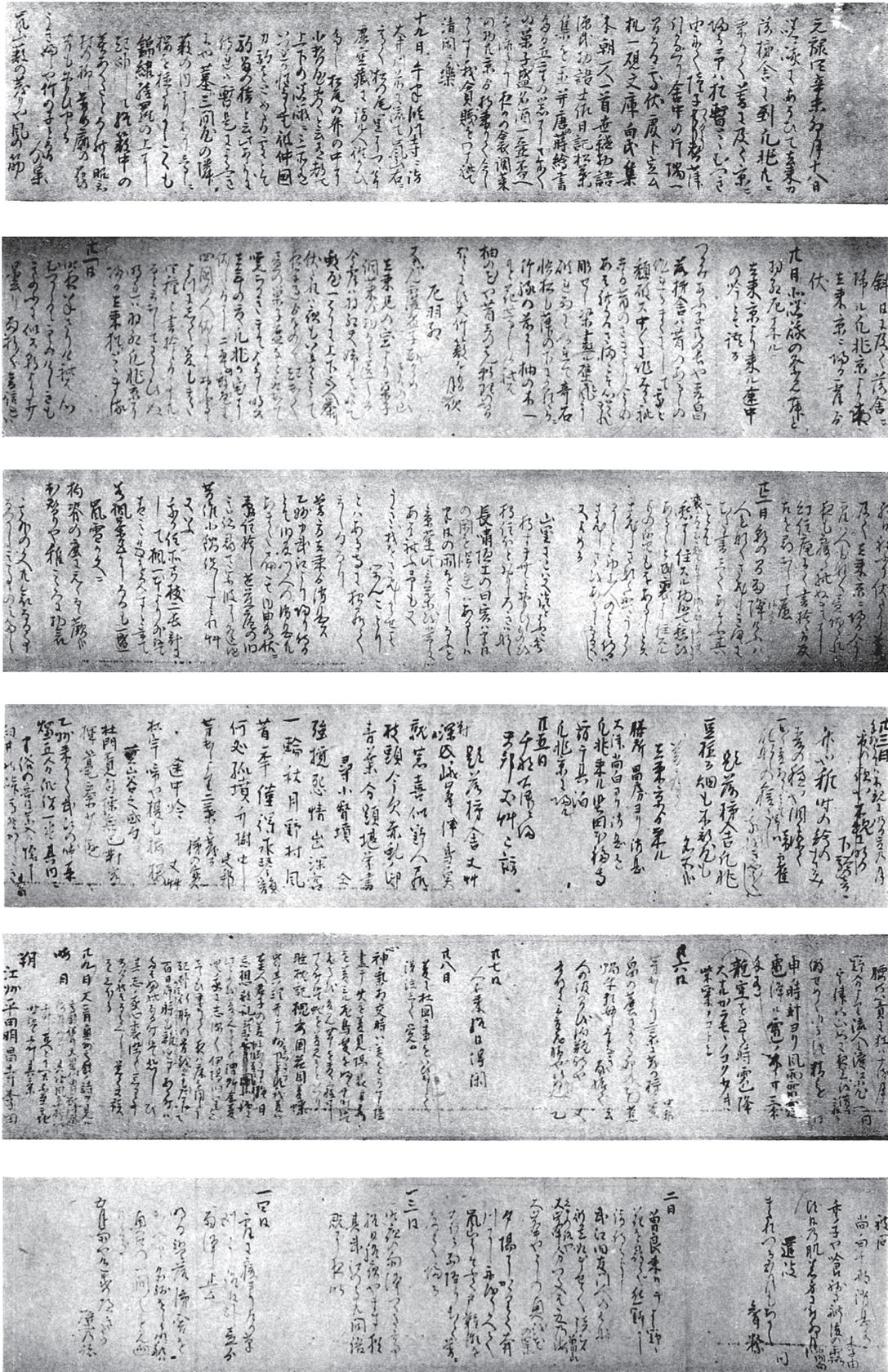


図1 野村本『嵯峨日記』  
藤井乙男等編『芭蕉圖録』（靖文社、一九四三年）より

ルールらしきものを守っているが、それにも関わらず、四月二十九日の記録は当日の日付のすぐ下から起筆されているのである。そして「高館聳天」の行は、二十九日と晦日の日付の中間に位置していることや、晦日の記録の最後の一行が、五月一日の日付の真下まで来ているなど、不自然な点が少なくない。

野村本の全体的な流れとして、冒頭辺りは改まった態度で臨むような書き方をしていたが、後の部分になるにつれ、徐々に緊張感が薄れ、前の日の記録と次の日の条の間により多くの余白が生じてくる。特に四月二十六日と二十七日の間、五月一日と二日の間、それから五月三日と四日の間にある間隔は必要以上にさえ感じられるほどの広さである。そうした余白のことを考慮に入れると、四月二十九日・晦日の条の特異さは一層際立つことになる。とすれば、四月二十九日・晦日の日記が記されたスペースは、そもそも四月二十八日と五月一日の条の間にあった余白ではないだろうか。

残念なことに、現在、野村本の所在は確認できず、新編日本古典文学全集所収『嵯峨日記』の本文も野村本の写真に依拠して作成するしかなかった。そのような状況にあつて明確な断定はできないが、野村本が芭蕉真蹟の忠実な臨模であるという学界の通説に従えば、『嵯峨日記』の四月二十九日・晦日の条は、芭蕉が四月二十八日と五月一日の条の間にあつた空白に書き入れた補写部である可能性がある。すなわち、二日分の記事を一条にまとめて、それを一箇所に補記されたのが、四月二十九日・晦日の部分であろうと推測される。

### 三 四月二十八日の条

ここに至って新たな問題が生じる。もしそうであれば、前述したようにその前後に複数の広いスペースがあるのに、『本朝一人一首』関係の記事をなぜ四月二十八日と五月一日の間に挿入しなければならないの

か。その理由を探るには、『嵯峨日記』四月二十八日の条を組上に載せる必要がある。

廿八日

夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム。

心神相交時ハ夢をなす。陰尽テ火を夢見、陽衰テ水を夢ミル。飛鳥髪をふくむ時は飛るを夢見、帯を敷寝にする時は、蛇を夢見るといへり。睡枕記・槐安国・莊周夢蝶、皆其理有テ、妙をつくさず。我夢ハ聖人君子の夢にあらず。終日妄想散乱の氣、夜陰夢又しかり。誠に此ものを夢見ること所謂念夢也。我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜ハ床を同じう起臥、行脚の勞をともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。ある時はハたはぶれ、ある時は悲しび、其志我心裏に染て、忘るゝ事なければなるべし。覺て又袂をしぼる。

四月二十八日の条は亡くなった杜国のことを夢見る一件である。野村本の該当箇所では、「夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム」という記録の左に、一行ぐらいの間隔があり、その間隔を置いてから「心神相交時ハ夢をなす」云々というふう<sup>1</sup>に記述が続いているわけであるが、現代の活字に直すと、跡形もなく消えてしまうこの間隔の存在は、見過ごしてはいけないところである。

そもそも同じ日の記述の中に、なぜ間隔を設ける必要があるのだろうか。先の四月二十九日・晦日の条では、スペース的な余裕もなく、かなり窮屈な書き方をしているにもかかわらず、「賦高館戰場」詩と芭蕉の評との間に歴とした一字の間隔があつた。この一字の間隔は、区別を明確にするための印であると考えられる。四月二十九日・晦日の条では、間隔の前は詩句の引用であり、その後は芭蕉の詩評である。それと同じように、四月二十八日の条においても、間隔の前とその後の文章は、実

は異なる性格をもつものではないか。

実際に読んでみると、四月二十八日の条の、一行の間隔の後の「心神相交時」以降の部分は、おおむね人間が夢を見る理由、夢と関係のある故事、そして自分の夢の分析などを説明する内容である。芭蕉はその日の記録の最後になって「覚て又袂をしぼる」と、再び当日の行動の記述に戻ったような書き方をするが、文章の構造として、一行の間隔を境に四月二十八日の条が明らかに二つの部分に分かれている。すなわち、間隔の前の方は日記の本文であり、その後の方は芭蕉の評釈であると理解してよいだろう。同じ本文と注釈の構造を有する例として、さらに『嵯峨日記』四月二十五日の条の末尾を挙げることもできる。芭蕉の自注による文章の展開をより分かりやすい形で示すために、左表を作成した。

	四月二十八日の条	四月二十五日の条
本文	廿八日 夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム。	(前略) 申ノ時計ヨリ風雨雷霆、電降ル。 電ノ大イサ三分有。
注釈	心神相交時ハ夢をなす。陰尽テ火を夢見、陽衰テ水を夢ミル。(後略)	龍空を過る時電降。大ナル、カラモ、ノゴ(ト)ク、小キハ柴栗ノゴトシ。

二十八日の条では「夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム」という本文の中に「夢」という言葉が出てきたので、人間はどういう時に夢を見るかという点、「心神相交時ハ夢をなす」以下の注釈が付けられた。それと同様に、二十五日の条の末尾では当日の天候について「申ノ時計ヨリ風雨雷霆、電降ル。電ノ大イサ三分有」と記された文章の中に、「電」という語彙があった。では、どういう時に電が降るか。芭蕉は「龍空を過る時電降」と自注の形で日記の文章を綴った。現在通行している『嵯

峨日記』の活字テキストでは分かりにくいですが、野村本では「龍空を過る時電降」の一行が改行してから書き出されていることも注目すべき点である。この改行の役割はまさに本文と注釈の区別を示すことであり、それを境目に文章の性格が変わるのである。

ところで、四月二十八日の条において、芭蕉は「陰尽テ火を夢見、陽衰テ水を夢ミル。飛鳥髪をふくむ時は飛るを夢見、帯を敷寝にする時は、蛇を夢見る」云々と、人間の体の状態や行動と夢との関係を語っているが、この部分は『列子』からの引用であり、同様の手法による解釈の例は、延宝八(一六八〇)年に刊行された『田舎の句合』・第廿一番<sup>⑥</sup>の判詞にも見える。

左持 農夫

侘に絶て一炉の散茶氣味ふかし

右 野人

火燵のうた、ねや夢に眞桑を枕にす

口切の一句、手づから鐘子をならし、茶袋を洗ふ。鹿茶淡飯の樂は、いかなる侘助にや。又火燵のうた、ねの夢は、列子曰「陽氣壯則夢涉大火燼燭、又籍帯寐則夢蛇」云々。是を以これを思ふに、爐邊のあた、か成に、瓜を夢見ん事、さもありつべし。

夢をテーマにする野人(其角)の発句に対し、芭蕉は『列子』の言葉を用いて判詞を書いた。ここでも評釈の対象(発句)と評論(判詞)との対峙が見られる。『嵯峨日記』四月二十八日の条における本文と評釈の構造は、句合の形式、つまり俳諧とその句評との関係にも相通じるように思われる。

漢詩や発句ではなく、日記をつける時でも注釈や評言を加えるようになったのは『嵯峨日記』の特色であるが、芭蕉が評釈の手法をそこまで

愛用したのは、当時落柿舎の机上にあつて、彼が熱心に読んでいた、日本漢詩の詩評が記された『本朝一人一首』の影響があるからであろう。夢の話と言えば、『本朝一人一首』の巻五には次の一条が載せられている。

夢中詞ス 白太保元相公ニ

高階積善茂範

二公身化シテ 早爲ル 塵ト

家集相傳ス 後人ニ

清句既看ル 同是玉

高情不レ 識又何神

風聞ス 在昔紅顔日

鶴望ス 如今白首辰

容鬢宛然ニ 俱入ル 夢ニ

漢都月下ノ 水煙瀆

林子曰、本朝先輩無レ 不レ 景慕居易一。故以ニ 野篁一 准レ 彼、以ニ 昔相一 爲勝レ 彼。且昔相、長谷雄有ニ 元白復生ノ 之話一。先是、朝綱既夢ニ 居易一。至ニ 積善一 併ニ 元白一 夢レ 之。蓋其景慕之深到レ 如レ 此者乎。可レ 謂ニ 思夢一 也。麗藻所レ 載積善詩數首、然不レ 論ニ 其優劣一。載レ 之以備ニ 一故事一。

『本朝麗藻』の編者でもある高階積善は、夢の中で自分の尊敬する白居易と元稹に会ったことを詩に詠んだわけであるが、彼の詩に対し、鶯峰はまず「本朝の先輩居易を景慕せざるは無し」と指摘し、元白との関わりをもつ王朝の漢詩人を列挙してから、すでに居易を夢見た大江朝綱の先例と比較し、一度に元白の二人を謁見したという積善の夢について「蓋し其の景慕の深きこと此の如きに到るものか」と嘆じ、そのような夢を「可謂思夢也」と評している。

「思夢」とは『周礼』にも『列子』にも見える、いわゆる「六夢」（正夢・噩夢・思夢・寤夢・喜夢・懼夢）の一つであり、平生心にかかっていることが夢に現れるものをさす。そう言えば、『嵯峨日記』四月二十八日の条にも「誠に此ものを夢見ること所謂念夢也」という夢に対する芭蕉の自評が見えるが、ここの「所謂念夢也」と鶯峰の言う「可謂思夢也」

との類似は、単なる偶然ではないだろう。杜国を夢見たのは、「其志我心裏に染て、忘る、事なければなるべし」と自らも分析したように、芭蕉の「念夢」は故人への思慕によるものであり、やはり「思夢」の一種と言える<sup>(7)</sup>。「袂をしぼる」場面といえども、芭蕉が評釈の形を借りて杜国を夢見ることと絡めながら、夢に関する己の学殖をそれとなく披露しているところは、俳諧師らしい、微笑ましい一齣でもある。

『本朝一人一首』の読後感を記した四月二十九日・晦日の前日に、様々な夢がある中で奇しくも思夢と似たような念夢のを取り上げた芭蕉の文章は、鶯峰の詩評と深く関わっていると言わなければならぬ。恐らく芭蕉は四月二十八日あたりも、『本朝一人一首』に目を通していただろう。してみれば、『本朝一人一首』に読みふけた二日間の読書メモが、四月二十八日の記録の後に挿入されたのも故なしとしない。つまり、四月二十九日・晦日の条は、『本朝一人一首』を読んでいるという共通項をもつ四月二十八日条の続きではなかったか。

要するに、『嵯峨日記』には本文と自注という二種類の異質な文章が併存し、しかも芭蕉はそれらを意識的に書き分けている。『嵯峨日記』の執筆にあたって芭蕉が評釈の手法を好んで用いたのは、『本朝一人一首』の詩評からの影響が大きいと思われる。

#### 四 『おくのほそ道』における曾良の登場と紹介

周知のように、『おくのほそ道』は執筆時期が『嵯峨日記』に近いので、落柿舎での読書、とりわけ『本朝一人一首』に示した芭蕉の関心が『おくのほそ道』の創作にも何らかの刺激を与えた可能性がある<sup>(8)</sup>。以下、『おくのほそ道』に及ぼした『本朝一人一首』の影響について私見を述べる。まず注目したいのは、曾良の登場と紹介である。適宜省略しつつ、『おくのほそ道』の「室の八嶋」から「黒髪山」までの文章を掲げる。

室の八嶋に詣ス。同行曾良が曰、「此の神ハ……  
卅日、日光山の麓に泊る。……

卯月朔日、御山に詣拜。……

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

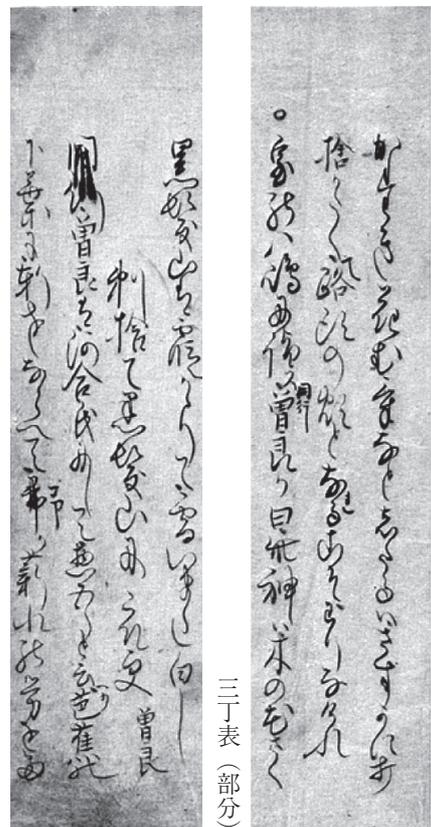
剃捨て黒髪山に衣更 曾良

曾良は河合氏にして惣五良と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。此たび松嶋・象潟の眺共にせむ事をよるこび、且ハ羈旅の難をいたはらんと、旅立晝髪を剃て墨染にさまをかへ、惣五を改て宗悟とス。仍て黒髪山の句有。「衣更」の二字、力有てきこゆ。

曾良が『おくのほそ道』の作中に登場してきたのは、「室の八嶋」(甲)であるが、しかし芭蕉はすぐには人物の紹介をしなかった。曾良のことが正式に読者に紹介されたのは、「黒髪山」(乙)になってからのことである。登場と紹介の間に一定の時間が経過している。

図2の曾良本『おくのほそ道』を見れば分かるように、もともと「黒髪山」の段で曾良の名前の前についていた「同行」という文字が消され、「室の八嶋」で、曾良の名前が初めて現れるところの横には、小さい字で、「同行」の二字が書きいれられている。この「同行」の訂正は、最初に登場してきた時点で、曾良のことについて全く説明がないのは都合が悪いと判断したことを意味するだろう。むしろ曾良本の書入れがすべて芭蕉本人によるものかどうかについては、近年活発な議論が交わされている<sup>(9)</sup>。その当否はともあれ、曾良の登場と紹介の間にズレがあることは、従来問題視されている。芭蕉としては、曾良を紹介するタイミングが、最初の登場時ではないという不自然さを十分認識しつつ、あえて「黒髪山」の段で曾良を紹介することにこだわったのである。では、なぜ「黒髪山」でなければならぬのか。他の章段と比べて、「黒髪山」のどこ

図2 曾良本『おくのほそ道』における「同行」の訂正



三丁表(部分)

四丁表(部分)

天理図書館善本叢書叢書之部第十巻『芭蕉紀行文集』(八木書店、一九七二年)より

が違うだろうか。

答えは簡単である。そこは曾良の発句が初登場した場所である。芭蕉は「黒髪山」の段の最後で、「衣更の二字、力有てきこゆ」と曾良の句を評価したが、そのような言い方自体、実は漢詩の評注に由来するものであろうことは、すでに上野洋三氏によって指摘されている<sup>(10)</sup>。それとは別に、曾良を紹介する文章は、発句に対する批評の一部として機能するところも、見逃してはいけなないポイントの一つと思われる。言い換えば、「黒髪山」における曾良の発句以降の文章全体を芭蕉の句評として捉えることができる。句評という形式による曾良の紹介にこだわることがゆえに、芭蕉は曾良の発句を待っていたのではなからうか。

当時芭蕉の身辺にあった詩歌の評注で、しかも作者の伝記も記したものとすれば、ほかならぬ『本朝一人一首』の名が思い浮かぶ。芭蕉は曾

良の小伝を記し、句の生まれる背景を説明した後、最後になって一言で軽く曾良の句に評言を加えたが、そのような句評のスタイルはまさに『本朝一人一首』に見られる典型的な詩評（たとえば、前掲した藤原道長の例）の特徴とうまく合致しているのである。

さらに言えば、曾良の改名について芭蕉は「惣五を改めて宗悟とス」と紹介しているが、これも漢文訓読の記憶から生まれた言い回しであることは想像に難くない<sup>(11)</sup>。『本朝一人一首』巻七・藤原家光の詩に対する鶯峰の評では、「□を改めて○とす」という諱を避けるための改名を列挙する文言が繰り返し使われている。

林子曰、家満者資実子、家宣弟也。満本作レ光。今避テ前大君御諱一、改爲レ満字一。光満倭訓相通者、是流例也。聊倣下史遷改レ啓爲レ開、改レ徹爲レ通、孟堅改レ荀爲レ孫、改レ莊爲レ巖之例上。

鶯峰自身も史記や漢書の先例に倣って、藤原家光の「光」を「満」の字に変えて、そういう改名の方法を、「光満倭訓相通ふは、是流例也」と説明した。

先行研究<sup>(12)</sup>によれば、曾良の本名は岩波庄右衛門正字であり、同時代の資料の中で、彼の俗名を河合惣五郎とするのは『おくのほそ道』のみであるという。今まで様々な角度から検討されてきた『おくのほそ道』の文芸性や虚構性の問題、それから黒髪山における発句自体は芭蕉の代作ではないかと疑う説<sup>(13)</sup>などを念頭に入れると、芭蕉による曾良の紹介が、どこまで実在する曾良という人物の伝記資料になりうるか。それについてなお検討の余地があるだろう。特に「惣五を改めて宗悟とス」と言われた曾良の改名は、歴史上の事実なのか、それともただ『本朝一人一首』の言い回しをもじった俳諧的創作なのか、現段階では未解決とせざるを得ないが、芭蕉は『本朝一人一首』の詩評の特徴をかなり意識

しながら、「黒髪山」における曾良の句評を書いていたと考えられよう。

## 五 立石寺と長楽寺

山形領に立石寺と云山寺有。慈覚大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすゝむるに仍て、尾花沢よりとつて返し、其間七里計なり。日いまだ暮す。麓の坊に宿かり置て、山上の堂に登。岩に巖を重て山とし、松栢年ふり、土石老て、苔なめらかに、岩上の院々扉を閉て、物の音きこえず。岸をめぐり岩這て、仏閣を拜し、佳景寂莫として、こゝろすミ行のミ覚ゆ。

閑さや岩にしみ入蟬の声

右は『おくのほそ道』の「立石寺」である。「閑」という言葉に着目し、章段全体として『寒山詩』の影響が強いという従来の説<sup>(14)</sup>は揺るぎないものと思われる。しかし細部の文章、例えば傍線部の立石寺についての具体的な描写は、『寒山詩』よりも『本朝一人一首』所収の日本漢詩を踏まえているのではないかと考えたい。『本朝一人一首』巻六において、藤原実範の「遍照寺翫月」に対し、鶯峰は次のような詩評を下した。

林子曰、實範者藤氏南家儒也。其家業自レ茲勃興。此詩雖レ似ニ平易、然レ非レ無レ所レ注レ心。遍照用ニ寺名一而於レ月相當。秋雪之句、雖ニ譬喩ト、非レ見レニ禹錫詩一、則難ニ連言一。末句倣下許渾所謂莫辭達レ曙慙望、一墮ニ西巖一又隔レ年句上。曾遊ニ長樂寺一聯曰、莓苔石滑路猶淺、松柏山寒枝不レ長。爲ニ時人一被レ稱。其序用ニ白駒云云事一、其出處在ニ盧照隣集一。人服其博覽。然、則實範以下時人專讀中白氏文集上有ニ不滿之意一。粗涉獵ニ唐諸家詩一者可レ知焉。其序文今不レ傳、可ニ以惜一焉。

実範が長楽寺に遊んだ時に作った詩の中に、「莓苔石滑らかにして路猶邃く、松柏山寒うして枝長からず」という、時の人に賞賛された一聯があるという。この二句には「苔」もあれば、「石」もあり、そして「松柏」という言葉はめ込まれていることが興味深い。芭蕉が立石寺の古くて静かなイメージを作り出すのに用いられた代表的な風物の殆どが、この一聯から見出すことができる。

鶯峰の詩評によれば、実範は「時人専ら『白氏文集』を読むを以て不満の意有り」というが、いささか皮肉なことに、長楽寺で作った実範の詩が、白居易の「遊坊口懸泉偶題石上」（『白氏長慶集』卷二十二）の一聯からヒントを受けたものであることはほぼ確実である。白詩の一部<sup>(15)</sup>を掲げると、

虚明<sup>ニメニ</sup> 見<sup>ニ</sup> 深底<sup>ソコ</sup>  
 仙棹<sup>ハ</sup> 浪悠揚<sup>タリ</sup>  
 巖寒<sup>ハ</sup> 松柏短<sup>カシ</sup>  
 錦座映<sup>ハ</sup> 高低<sup>カサス</sup>  
 浄緑<sup>ニシテ</sup> 無<sup>ニ</sup> 織垢<sup>ツ</sup>  
 塵纓<sup>ハ</sup> 風抖擻<sup>ス</sup>  
 石古<sup>フリテ</sup> 莓苔厚<sup>ツシ</sup>  
 翠<sup>トリノ</sup> 屏張<sup>ハ</sup> 左右<sup>レリ</sup>

ここにも同じ「松柏」・「石」・「苔」の三点がセットで使われている。実範のいう七言の「松柏山寒枝不長」は、明らかに五言だった居易の「巖寒松柏短」を敷衍したものである。もちろん、芭蕉も『白氏文集』から「巖寒松柏短、石古莓苔厚」の一聯を自家薬籠中の物とした可能性はないわけではないが、居易の詩は寺を詠むものではないので、やはり長楽寺を詠む実範の詩が、『おくのほそ道』「立石寺」の創作により直接的な影響を与えたと思われる。しかも長楽寺と言えば、『本朝一人一首』巻八にも同寺を詠む一聯が収められている。

遊<sup>フ</sup> 長楽寺<sup>ニ</sup>  
 青苔院静<sup>ニシテ</sup> 地空老<sup>クワ</sup>  
 源師房  
 碧樹路深<sup>シテ</sup> 山不<sup>ス</sup> 童<sup>カフロナラ</sup>

「青苔院静かにして地空しく老ふ」という漢詩の読み下しは、『おくのほそ道』「立石寺」に見られる「土石老て、苔なめらかに、岩上の院々も扉を閉て、物の音きこえず」という芭蕉の俳文と、表現しようとする内容においてかなり近似しているのではなからうか。要するに、芭蕉は日本漢詩の表現を俳諧の文章に和らげ、『本朝一人一首』で読んだ長楽寺のイメージをそのまま立石寺の描写に利用したのである。

## 六 一鳥声聞かず

『おくのほそ道』「尿前の関」には、次のような一節がある。

あるじの云にたがはず、高山森くとして一鳥声きかず。木の下闇茂りあひて、夜行がごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中踏分く、水をわたり岩につまづいて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出。<sup>(後略)</sup>

中には、「一鳥声聞かず」という表現が使われているが、諸注の語釈を見ると、その典拠として挙げられたのは、王安石の「鐘山」（「鐘山即事」）にある「一鳥不鳴山更幽」という有名な一句である。『聯珠詩格』の巻十四から同詩を抄出する<sup>(16)</sup>。

澗水無<sup>レ</sup> 聲繞<sup>テ</sup> 竹流<sup>ル</sup>  
 茅檐相對坐<sup>シテ</sup> 終<sup>レ</sup> 日<sup>ヲ</sup>  
 竹西花草露<sup>ニ</sup> 春柔<sup>ニ</sup>  
 一鳥不<sup>レ</sup> 鳴山更幽<sup>ニ</sup>

ここにいささか疑問に思うところがある。よく比較すれば分るように、

王安石の詩に詠まれたのは、のんびりした山中の暮らしぶりであり、「一鳥鳴かず山更に幽かなり」の詩意から伝わってくる悠然とした静寂さは、『おくのほそ道』の、一抹の不気味ささえ感じられる緊張感の中、冷たい汗を流しながら、峠を越えようとする主人公の心情とは、大いに異なると言わざるをえない。また、言葉の対応関係から見ても、「一鳥」および否定表現の使用は両者の共通点として数えることができるが、しかし「一鳥声きかず」の「声」と「聞く」という二つのキーワードが、安石の詩句に見当たらないのはやはり気になるところである。果たして王荊公の「鐘山」を、「一鳥声聞かず」の典拠にして妥当であろうか。

そこで、もう一つ比較の対象として取り上げたいのは、『本朝一人一首』卷三・空海の「在唐觀昶法和尚小山」に対する鶯峰の詩評である。

林子曰、嘗聞、藤斂夫先生、暇日見下性靈集後夜聞二仏法僧鳥一詩上、以爲「集中第一」。其詩曰、閑林獨坐草堂暁、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、聲心雲水俱了了。然今於二經國殘編一載二在唐之作一首。

この条において、鶯峰はエピソードを交えながら、空海の「後夜聞仏法僧鳥」詩を紹介した<sup>(17)</sup>。その説明によれば「後夜聞仏法僧鳥」は、藤原惺窩が空海の『性靈集』を読んで「集中の第一」と称賛したほどの傑作であるが、『本朝一人一首』の読者である芭蕉にとっても、この詩は印象深い一首であろう。

後夜とは夜半から夜明け前の時間帯を意味し、現在の午前四時ごろにあたる。空海の詩は夜明けの、まだ薄暗い静かな森の中で仏法僧鳥の鳴き声が聞こえ、その鳥の声から悟りの境地を開いたことを詠んでいる。静かで暗い森の中、鳥の鳴き声を聞く。このような場面の設定は、『おくのほそ道』「尿前の関」に見られる「高山森く」として、一鳥声きかず。

木の下闇茂りあひて、夜行がごとし」の雰囲気と一脈相通じると言えよう。

仏法僧鳥は三宝鳥ともいい、古くから霊鳥とされているが、芭蕉は「三宝の声一鳥に聞く」という空海の詩句を逆に「一鳥声きかず」と転じることによつて、暗い森の中、導いてくれる霊鳥もなく、ただ途方に暮れる主人公の姿が躍如として描き出されたのではないだろうか。『本朝一人一首』で読んだ空海の詩を一ひねりして、それを「尿前の関」における難所越えの不安と恐怖を引き立てる表現として活かしたところに、芭蕉の俳諧的な機知がよく働いていると思われる。

### おわりに

元禄四年、嵯峨滞在中の芭蕉は、王朝文学の舞台である京都の郊外に身を置き、「我貧賤をわすれて清閑二楽」しむ十七日間を送っていた。『嵯峨日記』の冒頭で挙げられた六種の書物は、かなり周到な用意のもとで選ばれたものと言わなければならぬ。和漢を問わず、そのリストから読みとれるのは王朝文学を中心とする雅の世界に対する芭蕉の憧憬である。

『本朝一人一首』を繙けばすぐ分かるが、鶯峰は詩評の至る所で、居易の詩句と王朝の日本漢詩人たちの作品をつき合わせている。その意味で、『白氏文集』は『本朝一人一首』を読むための必須の参考書であると言つてもよい。両書が相携えて落柿舎の机上に置かれたのも決して偶然のことではないだろう。

芭蕉は元禄四年よりもっと早い時期から『本朝一人一首』を読んでいたと思われる。多くの日本漢詩を収録した著作であるだけに、『嵯峨日記』以前の段階における『本朝一人一首』の受容も新たな問題として浮上する。芭蕉における林家の学問と文学の影響や、芭蕉俳諧と日本漢詩の關係については、今後の課題として引き続き研究を進めていきたい。

## 注

- (1) 本稿における『嵯峨日記』・『おくのほそ道』の引用は新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（井本農一 校注・訳、小学館、一九九七年）による。『本朝一人一首』の原文および詩文の読み下し等は、新日本古典文学大系『本朝一人一首』（小島憲之 校注、岩波書店、一九九四年）に従う。入力の便宜上、一部の字体や訓点の表記を改めた。
- (2) 『嵯峨日記』の諸注に見える『本朝一人一首』の解題にも少なからずの誤解が混在することは、別稿にて指摘したい。
- (3) 『本朝一人一首』の諸本について、黒川玄通の跋文を有する玄通跋本と、それを有しない流布本との関係に注意を要する。
- (4) 落柿舎の机上に置かれた六種の書物の中で、芭蕉に「世継物語」と呼ばれたものが『栄華物語』なのか、それとも『大鏡』なのか、まだ統一した見解に至っていないようであるが、芭蕉が『本朝一人一首』を読んでいたことは確かであり、同書の藤原道長項における鶯峰の詩評には、明らかに「世継翁物語」と「赤染栄華物語」を区別して併記しているので、芭蕉のいう「世継物語」も『大鏡』を指すと考えてよい。
- (5) 『現代語訳付 笈の小文・更科紀行・嵯峨日記』（和泉書院、二〇〇八年）において、上野洋三氏は「一首の詩を見るのに二日に亘ること」は無理があるとして、該当箇所は「兩日にあたる記事一条を記したもので」とあると解説している。なお、同書は『芭蕉講座』第五卷『俳文・紀行文・日記の鑑賞』（有精堂、一九八五年）に収める氏の執筆部分を補訂したものである。
- (6) 引用は、校本芭蕉全集・第七卷『俳論篇』（井本農一 校注、富士見書房、一九八九年）による。
- (7) 「念夢」という言葉は、或いは思夢をもじった、「念者の夢」を意味する芭蕉の造語かも知れない。（玉城司氏の教示）
- (8) 上野洋三氏の解説（注5に同じ）によれば、『おくのほそ道』高館の段における地理的正確さへのこだわりは、『嵯峨日記』四月二十九日・晦日の条で取り上げられた「賦高館戰場」の誇張した表現を受けてのことという。示唆に富んだ指摘である。
- (9) 小林孔氏の論考（『奥の細道』の展開―曾良本墨訂前後―『文学』一九九八年四月）をはじめ、曾良本『おくのほそ道』の補訂をめぐつて藤原マリ子氏、田中善信氏、金子俊之氏など諸家から様々な意見が出された。
- (10) 上野洋三「詩の流行と俳諧」『文学』、一九七三年十一月。同論考では『去来抄』に見える句評と『本朝一人一首』における鶯峰の詩評との関係も論じられている。
- (11) 『芭蕉論』（筑摩書房、一九八六年）Ⅱ『奥の細道』論」所収「人物の形象について――『奥の細道』の構成」(初出は『女子大文学』第三十一号、一九八〇年)において、上野洋三氏は「曾良を紹介する日光の段の文章が、文章の外形的リズムとしても『隠逸伝』中の文章のような、漢文訓読調を持っている」と述べている。
- (12) 久富哲雄「曾良」『芭蕉講座』第一卷『生涯と門弟』（有精堂、一九八二年）など。
- (13) 松尾靖秋「おくのほそ道」試論―曾良の句についての疑い」『近世文学論叢』、一九七〇年。
- (14) 尾形仿「おくのほそ道評釈」角川書店、二〇〇一年。
- (15) 同詩は五言二十八句からなっている。引用は明暦三年松栢堂林和泉掾刊『白氏長慶集』による。
- (16) 引用は正保三年吉野屋権兵衛刊『精選唐宋千家聯珠詩格』による。
- (17) 空海「後夜聞仏法僧鳥」について、『羅山林先生文集』巻七十一「随筆七」には次の一条が見える（ほぼ同趣の話は『梅村載筆』人巻にも所収）。
- 唐願況詩、棲霞寺裏子規鳥、口中血出啼不<sub>レ</sub>了、山僧後夜初入<sub>レ</sub>定、聞<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞山月曉。日本<sub>ノ</sub>僧空海住<sub>ニ</sub>紀州高野山<sub>ニ</sub>、頗<sub>ル</sub>知<sub>ニ</sub>文字<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>詩曰、寒林獨坐草堂曉、三寶之聲聞<sub>ニ</sub>一鳥<sub>一</sub>、一鳥有<sub>レ</sub>聲人有<sub>レ</sub>心、性心雲水俱<sub>ニ</sub>了<sub>一</sub>。山中有<sub>ニ</sub>異鳥<sub>一</sub>、聞<sub>ニ</sub>其聲<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>佛法僧<sub>一</sub>。惺惺先生謂<sub>ニ</sub>余<sub>一</sub>曰、空海此詩爲<sub>ニ</sub>性靈集中<sub>一</sub>之第一。余謂<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>況詩<sub>一</sub>其體相似。韻亦同。偶然耳。山背國宇縣醍醐山有<sub>ニ</sub>佛法僧鳥<sub>一</sub>。下野国河内郡二荒山有<sub>ニ</sub>佛法僧鳥<sub>一</sub>。山堂肆考鳥部有<sub>ニ</sub>佛現鳥<sub>一</sub>。可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>考見<sub>レ</sub>之。

【付記】

本稿は日本近世文学会平成二十二年度春季大会（於実践女子大学）における口頭発表に基づく。発表の席上およびその前後にご質問・ご教示を賜った先生方に対し、厚く御礼申し上げます。なお、論文の執筆にあたり、財団法人日本科学協会平成二十三年度笹川科学研究助成よりご支援いただいた。記して深謝の意を表す。

# Influences of *Honchō ichinin isshu* on Bashō's *Saga nikki* and *Oku no hosomichi*

CHEN Keran

The Graduate University for Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Literature

*Honchō ichinin isshu* (HII, hereafter), a masterpiece written by Hayashi Gahō, represents the first full-fledged research on Japanese kanshi. It is included in the *Shin koten bungaku taikai* series of classical Japanese literature. Bashō's *Saga nikki* (SGN) informs us that Bashō kept this book on the table in Kyorai's Rakushisha lodge. We know that while staying at Rakushisha, Bashō read through HII and made personal notes on the poetry in the book. There is no doubt that SGN provides us with an important clue to a possible link between Bashō and writings by the Hayashi family. However, there has not been much work done on how relevant HII is in research on Bashō. This essay illustrates the nature and the characteristics of HII before discussing how HII may have influenced Bashō, focusing on *Oku no hosomichi* (ONH) and SGN in particular.

Bashō's entries on April 29th and 30th in SGN could be viewed as notes made while reading the HII. I argue, based on a comparison between the last part of the April 25th entry and that of April 28th, that the main body of SGN and its self-created commentary are of a completely different nature, and that Bashō intentionally kept them separate. I made use of a version in possession of the Nomura family, one believed to be the most bona fide among the versions of SGN. Next, I will talk about Shimu, arguing that the poetry critique found in HII may have inspired Bashō to adopt the style of explanatory critique in his writing, based on observations from book five of HII.

This essay also points out that some of Bashō's text shares certain characteristics found in the critiques by Hayashi Gahō, and demonstrates a possible link between Bashō and Japanese kanshi in HII by noting that some words Bashō used in ONH, *Ryūshakuji*, etc., actually come from books six and three of HII.

**Key words:** Bashō, *Honchō ichinin isshu*, *Saga nikki*, *Oku no hosomichi*, Hayashi Gahō, Japanese kanshi, haikai